

文化財の価値と人災プロジェクト

プロジェクト代表者：立命館グローバル・イノベーション研究機構・教授 谷口 仁士

共同研究者：山内 寛紀、豊田 利久、金 ミンスク、崔 青林、川道 美枝子、
中谷 友樹

【研究計画の概要】

美術工芸品の窃盗、歴史建造物への放火などの人災やアライグマなどの獣害から文化遺産を防御するための「リアルタイム高性能監視・防御システム」を開発するため、以下の研究を進める。

1) 人災・獣害の被害発生および対策事例に関する情報の収集・整理

社寺仏閣を対象に窃盗・放火および獣害(特に、アライグマ)に関する情報(出没、被害、周辺の植生など)収集について、過去に被害に遭遇した文化財所有者への聞き取り調査を行う。調査対象とする文化財は、重大な被害に遭遇した寺社仏閣(全国)および京都府内、奈良、滋賀県を対象とする。

2) 被害の時空間分布による特徴分析

上記1)で得られた情報(特に、京都市およびその周辺地域)を時間軸を入れたGIS上に再整理し、犯罪やアライグマ出没の特徴を分析する。この成果を一般公開(犯罪の公開の可否については検討を要する)し、有効な対策策定へ発展させる。成果の一般公開(例えば、歴史都市防災研究所のHPなど)の方法などの開発を行う。

3) 自動画像認識システムの開発

人物やアライグマの自動認識技術の開発を行う。さらに、人物の不審行動(犯罪実行)をリスク値として定量化し早期警報システムを構築する。

【研究成果】

I. 研究成果の概要

深刻な被害が報告されている美術工芸品の窃盗、歴史建造物への放火などの人災やアライグマなどの獣害から文化遺産を防御するための基礎資料整備として、「人災・獣害の発生に関する情報の収集・整理と対策事例の分析」の研究課題を進めた。今年度は、人災を中心に全国15寺院を対象にヒヤリング調査を実施し被害の特徴の把握を行った。

その結果、全国規模で仏教美術工芸品の盗難が頻発していること、盗難に遭遇する美術工芸品は小型仏像(50cm程度)の他掛け軸などであった。また、盗難の時間帯は朝や日中が多いことなどが明らかとなった。また、学外からの専門家などを招聘した研究会の開催(公開セミナーとして)を2回行った。

II. 研究成果の詳細

2012年度に実施した文化財所有者を対象に実施したアンケート調査の結果によると、防犯体

制としては巡回などの自主的な活動と警報設備が主な対策となっており、防犯設備の導入は全回答者の56.2%に留まっていることが判明した。

この結果を踏まえ、今後の文化財防御システムの開発に資することを目的に、①人災・獣害の被害発生および対策事例に関する情報の収集・整理、②被害の時空間分布による特徴分析、③自動画像認識システムの開発の3つの研究課題を設定し、①の課題を中心に遂行した。以下は、その成果である。

【事例1：奈良県天理市の寺院 C】

C 寺での盗難は、戦後は大きな事件が2回あった。1回目は40年前に大師堂で不動明王像2体が盗まれたが、まだ戻ってきていないという。事件時刻が夜であったため、被害後に本堂と庫裏に防災施設を設置し、レーザー式センサーも設置したという。

2回目は、約12～3年前に地獄絵9幅のうち、最後の1幅の来迎図が盗難に遭ったという。この地獄絵は普段は公開しないが、毎年10月23日から11月30日までは虫干しを兼ねて本堂にて展示をしていたが、その展示期間中に開山時間から拝観時間開始までの間を狙って犯行が行われたようである。数名のグループによる犯行で、1名が見張り役をし、2～3回は下見をしていたという。住職の話によると、C 寺は参道から入る受付経由の参拝もできるが、山からアクセスすることもできる立地であり、当時の犯行ルートは後者であったという。犯人は、3年前に逮捕されたが、奈良の至るところで賽銭を盗んでいたようで、賽銭泥棒として捕まえられた時にC 寺の賽銭も盗んでいたことが判明したという。盗品は、岐阜県のある古美術商が持っていたので、C 寺で買い戻したという。

この被害を機に本堂内には防犯カメラを設置(写真1)するとともに、本堂の回りには柵を設置し、境内の受付の近くには赤外線センサーを設置したようである。また、本堂と庫裏には自動火災報知器(空気管)はすでに設置されていたが、数年後に奈良県内に寺社の放火が次々と発生したため、炎感知器を本堂の12～3ヶ所に追加したという(写真1)。

また、C 寺でも仏具の盗難被害にあったようで、五鈷杵はよく使うから盗難に気づきやすいけど、三鈷杵は普段使わないから盗まれても気が付くまでは時間がかかっていたという。その他に、明治期には愛染明王像を盗まれ、その仏像が安置されていた仏堂も放火された事件もあったようである。愛染明王像は幸いに寺院に戻ったが、光背と台座は新造したものであるという。



写真1 C寺の本堂内外に設置されたセンサーとカメラ

なお、C 寺の防犯カメラやセンサーは、お寺独自で設置したものである。本堂は指定文化財でないので、防犯カメラはいたるところに設置されていた。悪質な窃盗犯から文化財を守るための自己防御の苦勞が分かった。

【事例2：法隆寺の落書き】

2013年11月27日付けの『読売新聞』に記事「法隆寺重文の塀2か所に落書き」(図1)が掲載されたため、筆者らは11月28日に現地調査に入った。被害は、西院伽藍の西側の大垣(版築)の路地側で発生しており、「殺すぞボケ」と「ヒマヤね」という落書きがあった。落書きの文言やその大きさよりも落書きの上部の土塀に貼ら

れている「文化財を大切に落書きはやめましょう」という掲示板が文化財防災の啓発に役だっていないことを如実に見せられた事例である。

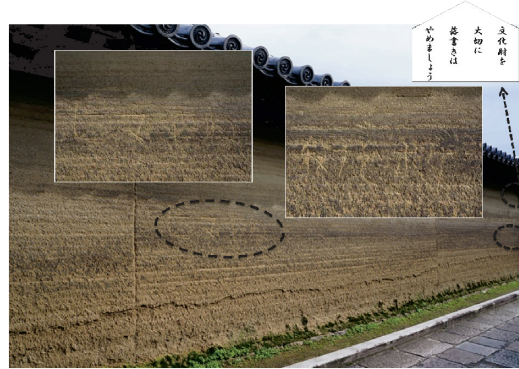


写真2 法隆寺の落書き被害(2013.11.28日撮影)



図1 『読売新聞』、2013年11月27日付け夕刊(10面)

今まで落書き防止には法隆寺と同様に文化財の前に注意書きを貼る方法を選択していたが、別の周知方法の開発も必要であると言える(写真2)。

【まとめ】

調査した事例から、以下のことが明らかと成った。

- 1) 古文書よりは仏像や絵画の盗難頻度が高い。特に高さ 50 cm ぐらいまでの小型の仏像や石造仏、掛け軸(カメラなどが設置されている宝物館に展示されているものよりは、お堂や収蔵庫の壁などに掛けられているモノ)などが狙われやすい。
- 2) 犯罪は、グループで下見をしたり(1名は見張り役で、リュックサックを背負っている場合が多い)、賽銭泥棒が美術工芸品まで盗む傾向があり、賽銭泥棒に要注意。
- 3) 犯行時刻は夜中より拝観開始時間の前後や開門時間中が多い。
- 4) 寺院への侵入口としては塀を超えることはなく、堂々と受付や正面の入口を利用することが多いが、立地条件によっては山の道を利用した場合もある。
- 5) 放火に関しては一カ所のみ狙われる場合もあったが、連続放火も多いため、文化財所有者は近所の被害ニュースを日頃から察知しておく必要がある。
- 6) 盗難や放火などの経験から従来の防火・防犯設備への見直しが行われ、設備の整備は進んでいるものの、多くの文化財所有者が補助金の対象範囲や補助金の上・下限額の設定問題に頭を悩まされていた。特に、現在の文化財保護政策では指定文化財を中心とした対策しか整えられておらず、防火・防犯設備の導入とそのメンテナンス費用における所有者の経済的な負担も大きいという固執的な課題は未だに解決されていない。

上記 6)の課題は、文化財の保存・継承への課題でもあり、防犯からの側面ばかりでなく総合的な視点からの解決が必要である。今後の調査研究では、より多くの事例を蒐集することで、被害を事前に防ぐための具体的な対策づくりのための案を提案できるよう努力するつもりである。

Ⅲ. 今後の研究計画・展開

盗難などの人災に至る経緯は、千差万別である。賽銭泥棒が貴重な文化財を盗む一方、プロの窃盗団によって計画的に盗まれていることもあった。近年、窃盗動機の多様化(金銭目的)や手口が進化(警報装置の熟知)している。このような現状から、今後は実態調査の事例を増やすとともに、防御方法の高度化・経済化も視野に入れた対策を講じるべきである。

仏像は“地域の信仰の対象”であり“地域に生きずいて来た歴史”がある。この「価値」を守りながら卑劣な人災から守るために、今後は防御方法に主眼を置いた調査研究を行う予定である。

Ⅳ. その他特記事項

文化財の盗難に関する注意の喚起や研究成果を社会に還元するため、公開セミナーを2回開催した。第1回は“いま、あなたの文化財が狙われている”と題するもので、和歌山県立博物館・主査学芸員、京都市消防局、関西野生生物研究所(アライグマ)の方々の発表、第2回は“進化する犯罪と防御システムの最前線”と題するセミナーである。

その他、研究成果としての論文を発表した。

- (1) 朴ジョンヨン、崔青林、金ミンスク、谷口仁士;文化財所有者を対象とした人災・獣害の現状と防御システムに関する調査研究、歴史都市防災論文集、Vol.7、2013.7
- (2) 金ミンスク、谷口仁士;文化財の人災(放火・盗難)に関する現地調査報告、京都歴史災害研究、Vol.15、2014.3(発刊予定)